

## カテゴリー考察 それから

カテゴリーについて以前にも書きましたが、この「カテゴリー」の違いに対する認識が希薄であるがために、試合日程を決めるにあたり不要な混乱を招き、筋違いの非難が交わされるのは残念なことです。そこでもう一度「カテゴリー」について考えましょう。

### カテゴリー その1

日本の大学チームが英国遠征したとき、学校制度上は同じ大学でも、スポーツに対する取組方が異なる場合、即ちカテゴリーの違うといえるチームの間に力の差があるのは当然なのに、何等違いが見えなかったことについて書きましたが、毎年の高校の遠征についてもいえます。トーナメント形式一本で、勝敗にこだわる早成型と、伸び伸びと楽しむ晩成型のチームとでは、平素の取組方が違い、それが点数の差となって現れるのは当然のことで、日本のレベルが上だと短絡的にいえないのです。

試合は勝敗の前にカテゴリーが同一かどうか確認することが大切で、見方が違ってからです。主催者は、カテゴリー同一か、異種交流か明確にし、運営の主旨を明確にしなければなりません。参加者は、カテゴリーを確認し、参加不参加の意思を決定しなければなりません。劣勢部属のチームが自覚して優勢部属チームに挑戦することも無意味ではありませんが、問題は自覚無くして戦い、勝敗だけにこだわり、ランク付けを楽しむだけでは進歩がないのです。

今年、大学選手権の日程を変更し、朝令暮改することになりました。大学・社会人の一流チームを一つのカテゴリーに組み込んで終った結果です。日本選手権でも同じことがいえます。関西の大学トップチームが早期にあえなく敗退したのは、テストと重なったからということですが、テストで単位をとることは、学生として必須要件です。原因をたどればカテゴリーの違いを慎重に考慮しなかった主催者側の問題ですが、カテゴリーの自覚が不十分であった参加者側も問題です。参加者側の意見が通らず仕方なく参加したのであっても、参加した以上はそのことを言うべきではありません。もしこれら2つの場合に、参加者としては何も言えなかつたというならば、問題は一方的に主催者ということになります。

### カテゴリー その2

制度・呼び名は同じで、社会的に認められていても、率直に言ってカテゴリーが違うと言わざるを得ないような場合があつます。種類という意味では kind が使われますが、category は種類、部属という意味でも、ある内容をもとに同じ範疇に入るものということで、特別の中身があるのです。

高校同士であるのに、全国大会やその予選において、カテゴリーの違うチームの戦いと評されることがあるのは、学校によって特別の部分が違うということをさしているのです。合格に値する学力のないままに、推薦入学が認められ、いろいろなテストも恩恵のもとに通過する学生達のチームと、厳しい入学試験を努力して突破し、スポーツと学問の両立を図りながら、いろいろなテストを苦労して通過する生徒たちのチームが戦うのです。後者の意地と挑戦に期待しても所詮無理は無理です。惨敗の結果ラグビーへの興味を無くしてしまうケースが積もり重なって、競技の底辺が狭まってしまうこともあるのです。

社会人チームともなれば、親企業の業績も大きな条件になってきます。親企業の力の入れ方がそれぞれ精一杯であってもそこに差があるかぎり、時にはチームの成績にも影響があるというのが現実です。

プロ野球にちょっと目を向けてみましょう。金力に任せて選手を集めるチームと、そうでないチームは戦力的には、戦う前から勝敗が決まっているようなものです。赤字チームが名称権を売る話も飛び出しました。しかし、後者が変身して優勝するのにかかるのも、プロスポーツの楽しみ方の一つで、昨年は阪神が世を湧かしました。プロはカテゴリーを論じる世界ではありません。プロの話ではありませんが、ラグビーの世界では、近鉄がトップリーグに留まることができたことで胸を撫で下ろしました。往年の名チームが、カテゴリーの違いという現実に抗しきれずに後塵を拝しているのは寂しい限りです。

### カテゴリー その3

カテゴリーを問題にせず、自覚し意図的に対戦を組み、刺激とエネルギーを与えて実を結んだのが W 杯でのイングランドチームです。プレミアムリーグなどイングランドの優勝は強行スケジュールの実施や選手選抜で、格段に心身ともにタフにならしめた意欲と熱意の成果が大きかったと思います。

カテゴリーと個人の自覚と社会的認識という点では、NZの選手が、第2回 W 杯で日曜の礼拝を優先させて出場を辞退し(\*1)、予定メンバーからはずれたために(100%その結果とはいえませんが)最終的に優勝しなかったことがありました。大会をどう戦うかはチームもしくは個人の問題で、人間性が埋没してしまっていないケースもあるのです。

勝つために必死で練習することはいけないことではありませんが、アメカンフットボールのアイビーリーグのチームが来日したときのコーチの「日程的に練習制限していることは、学生にとって当然なことである」という言葉は、勝敗を争い、スポーツを楽しむための知恵の問題で、学ぶべきものです。

### カテゴリー その4

「学生が社会人チームに16年ぶりに勝った」という言葉に、カテゴリーの認識の度合いについて疑問を持たざるをえません。

釜石シーウェイブスはクラブチームです。企業チームと一括して社会人チームという範疇にいれてしまってはいけません。日本に育たなければならない、育てなければならないチームの魁なのです。勝った学生を誉めるのでなく、健闘した釜石こそを称えるべきです。花園で関西の人々に釜石の名を再び思い起こさせたあと、秩父宮で是非一勝することを期待していました。東京での一勝が、チーム自身にとっては勿論ですが、支持し応援している人達の喜びが、更なる熱情と活力を生み、今後の発展の弾みになることを願っていたからです。せめて、カテゴリーについての認識を深めて、敗戦の評ぐらいは釜石を後押しするものであってほしいと思いました。

南の八幡に対し北の新日鉄釜石は、今は亡き先人たちの努力と、しばれる寒さに負けずに、町あげての鉄をも溶かす熱情から生まれ育ち、関係者の熱い期待と声援のもと7年連続日本一の偉業を成し遂げました。釜石シーウェイブスと過去のチームは、母体・組織が違い、環境の違いからくる大きな温度差を跳ね退けてがんばっている、地域に基盤をおいた地域密着型のクラブチームです。オープン制の日本選手権に出場することの意義を感じ、活躍を期待していました。惜敗に重ねてマコーミックが去ることは寂しい限りです。

2004.03.08  
西川 義行

\*1: リンク ([「ジョーンズ/マイケル」](#)) を参照